

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

マヤ諸語：私のフィールドノートから 33

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八杉, 佳穂 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4614



〔リレー連載〕

私のフィールドノートから

〔……発見とときめきのフィールド言語学……〕

第33回

八杉佳穂

やすぎ よしほ

＊

マヤ諸語



マヤ諸語は、三十の言語からなり、八百万人ほどの話者が、古代マヤ文明が栄えたのとほぼ同地域にいます。

母語以外の言語となると、ふつう一つの言語に習熟するのがやっとなのであるが、たくさんの言語に精通した人も中にはいる。私は日本語さえ思うように操れないのであるから、英語も長い間学んできたが、当然できない。マヤ諸語となるととっととひどい。話すことも聞き取ることもできない。それでも時折調査に行く。それはマヤ諸語がマヤ文字の解説やマヤ文明の理解の基礎となるから

である。ただそのために、不向きな調査や言語学や考古学などの勉強をしているに過ぎない。

マヤ文明を総合的に理解するには、さまざまな観点からせまっていかなければならない。私はマヤと名がつくものなら何でも興味があるが、なかでもマヤ人が文字を使っていた三世紀から十世紀の古典期マヤ時代の言語はどのようなものであり、現在の言語とどのくらい違っているかが最大の関心事である。とはいえマヤ全体に興味広がっているので、言語の調査はどうしてもおろそ

かになっていく。

もう三十五年前になる。フィールド調査として最初に訪れたのはワステコ語が話されるサン・ルイス・ポトシ州のアキスモンであった。マヤ諸語はマヤ文明が栄えた地域にかたまっている。ところがワステコ語だけは、なぜか遠く離れたベラクルス州北部からサン・ルイス・ポトシ州西部にかけて話されている。ワステコ語と親縁関係が強いチコムセルテコ語は現在死語であるが、こちらの方はマヤ諸語が密集しているグアテマラとの国境に近いメキシコのチアパス州で七十年前くらいまで話されていた。だからワステコ語が北に移動したのか、それともワステコ語が話されている場所からユカタンまでの全域にマヤ諸語が話されていて、真ん中にソケ語やトトナコ語が入ってきたのか、そのどちらかであろうが、それ以上の手がかりはまったくない。アキスモンに行ったのは、その不思議を体感したかったことも理由の一つであるが、ともかくまずはマヤ諸語の特徴である声門閉鎖音を聞きたかったからである。百聞は一見にしかずと言うが、一聞で長い間疑問であった音が理解でき、発音できたのである。声門閉鎖音は難しいと言われるが、所詮人間が発する音である。聞けばすぐまねできるものであることを実感した。

フィールドワークでもっとも驚いたのは、マヤでも女性が水汲みをして家事洗濯をするのを見たことであった。当たり前のことのようにあるが、どこへ行っても女性と男性の役割が違うことに

新鮮な驚きをおぼえたものである。というのも、学生時代、人間とは何かを考えていたからであり、学生運動とも関係があったのかも知れない。人間平等とはいうものの、男と女は違うものだと深く感心したのである。

もう一つ感じ入ったことがある。彼らはトウモロコシをすりつぶして焼いたトルティリヤや蒸したタマリットとスープくらいの質素な食生活をしている。人間毎日三十品目食べないといけないとか言われるが、そんなことはなくても十分人間は生きていくことに、これまたひどく感動したのである。とはいっても、フィールドで彼らと同じような生活をしていると、一月に十キロも痩せたので、過酷な生活をしていると言えるのかもしれない。

彼らの生活は基本的に農業である。とはいえ社会に必要な職業のほとんどに就いている。もっとも非インディヘナの人たちが社会に占める割合は大きいので、社会の支えをする職業に就いている人が多い。

三十年の変わりよう

三十年あまりの間に日本は大きく変わったが、マヤ人たちのおかれていた環境や社会状況も変わった。最初に訪れたアキスモンを二十数年ぶりに訪ねたとき、町のあまりの変わりように、ここが本当にアキスモンなのかとまどってしまった。記憶の衰えもあるが、そうばかりではなく、記憶に残る山の稜線がそのまま

あったことから、アキスモンに間違いなかった。しかしまったく違う町のごとく変わり果てていた。

ユカタンの村に、これも二十年ほど経て再び訪ねたときは、まだ記憶に残る家々がたくさんあった。やっぱりになった家の家族も健在であった。再会を喜んだのだが、驚いたことに、片言のスペイン語しか話せなかった奥さんが流暢にスペイン語を話すようになっていた。子どもたちは大きくなり結婚して子どもを育てていたが、みんなスペイン語を話すようになっていた。

一九七五年に最初にメキシコやグアテマラの村へ行つたころは、どこも「方言」蔑視であったし、自分たちの母語に言いしれぬ劣等感を大人ばかりか子どもたちも感じていた。学校でインディヘナの母語を話すと叩かれたという話さえ聞いたことがある。日本でも方言を学校で話すことを禁じたり、蔑んでいた時代があったが、同じことがマヤでもおこっていると思つたものである。

いまでもインディヘナの言語には文法さえないという人がいる。文法がない言語なんてあり得ないのに、かの司馬遼太郎でさえ「日本語は『てにをは』で結ぶ文章で、語尾はどうでもいいような、なまこみみたいな、軟体動物みたいな言語でしよう。文法もない。」（日本人を考える——司馬遼太郎対談集）文藝春秋社一九六〇・三〇）と言っていたのだから、無理もないことかもしれない。

一九八〇年代に入つて、スペイン語教育政策が実を結んでき

た。どこに行つてもスペイン語で会話が成り立つようになった。同時にインディヘナ言語の存亡の危機が現実味を帯びてきた。そのためといつていいだろう、母語を大切に作る運動が始まった。グアテマラでは、マヤ言語アカデミーができ、正書法が制定された。マヤ言語アカデミーをはじめ、オクマ言語研究所、フランシスコ・マロキン言語研究所や大学などが積極的にマヤ諸言語の復権に努めたお蔭で、各言語の中心地にマヤ言語アカデミーの支部ができた。そして辞書や文法書が作られ、子どもたちへの教育や識字教育などがさかんになっている。

以前は自分の話す言語を書き知る人などいなかったのであるが、どの言語にも少なくとも数人、母語を自由に書ける人がいるようになった。しかもコンピュータを使い、言語資料の作成に励んでいる。Eメールで連絡が取り合えるようになり、地球が小さくなつてきたことを実感する。

母語を記述できる人が増えたお蔭で、数年前、危機言語調査の一環として、グアテマラで話されている二十のマヤ諸語のうち十六言語のデータを集めることができた（YASUGI, Yoshino (ed.) (2003) *Materiales de lenguas mayas de Guatemala*）。四巻からなるこの本は、各言語五九三の質問項目で七九〇文からなる。各項はスペイン語の質問文、マヤ諸言語でそれにあたる文、形態素に分割した行、形態素を分析した行の四行一組からなる。

一六言語のうち十言語はオクマ言語研究所で働いている母語話

者に記述してもらった。残りは私が現地に赴いて採集したが、どこでも母語の書き取りができる人の協力を得ることができた。とはいえ文法的な分析は、すべての言語にわたって再検討せざるを得ず、そのため、何ヶ月もコンピュータの前に座る生活を強いられた。それは体をこわすほどつらい仕事であったが、これが二十年前なら、もっと苦勞を強いられたであろう。まず話者で母語を書き取ることができる人がいない、コンピュータがない、適切な文法書や辞書がない、などナイナイづくめであったからである。

世界認識の違い

マヤ諸語を研究していて、世界の見方が逆ではないかということに気づいたのは、十数年前のことである。主要部に文法的なマークをつける言語と従属部の方にマークをつける言語があることを知った。その違いは、大げさに考えると、世界認識の違いが言語に表れているということになる。



市の日のアグアカタンの女性たち

日本語は典型的な従属部に文法的な標識をつける言語である。それに対し、マヤ諸語は主要部に文法標識をつける

言語である。マヤ諸語がどれくらい違うかを理解してもらうためにも、調査した言語のなから「その男はその犬を殺した」という典型的な他動詞文を紙面が許す限り挙げてみよう (YASUGI 2003の20番)。といっても多くのマヤ諸語では「殺す」は典型的な他動詞ではなく、「死ぬ」という自動詞の使役形 (s) である。

チオルティ語	u-kin-s-aj-Ø a pek' a wink-i
モパン語	e wink u-cham-se-Ø e tzi'
ポプティ語	x-Ø-s-potx' naj winaj metx tx'i'
マム語	Ø-Ø-kub' t-b-y-o-'n ichin tx'yan
アワカテコ語	ye yaj n-kyim-san ye tx'i'
イシル語	u vinaj vet i-yatz' u tzi'
ケクチ語	x-Ø-x-kam-si li tzi' li winq
ボコムチ語	x-Ø-i-kan-saj-i tzi' i winaq
ウスパンテコ語	man wunag x-Ø-Ø-kam-saj ra tzi'
キチエ語	ri achi x-Ø-u-kam-saj-ri tzi'
サカプルテコ語	x-Ø-Ø-kam-s-aj li tze' li achen

例文からわかるように、文の主要素である動詞に主語や目的語を示す人称がついて、従要素の名詞の方には何もつかない。たとえばチオルティ語の u は a wink-i (その人) と照応し、Ø は目的語の a pek' (その犬) と照応する。u は三人称主語を表す人称

で (ergative)、三人称目的語は表す必要がないため (ゼロ要素) で表す (absolute)。文法的な情報が主要部についているから主要部有表示言語というのである。n-kin-s-e-i-s だけで「彼がそれを殺した」となり、十分文になる。そのため抱合言語といったり、複統合語といことがある。

語順は動詞―名詞―名詞が基本的であるが、名詞―動詞―名詞とスペイン語と同じ語順をとるようになった言語もみられる。名詞には何も文法的な印がつかない。そのため語順が大事になる。動詞 (V) の次に来る名詞が目的語 (O) で、そのあとに来る名詞が主語 (S) の場合 (VOS) と、動詞のあとに来る名詞が主語で、その次に来る名詞が目的語の場合 (VSO) がある。グアテマラ高地西部にあるマム語やポプティ語などが VSO であり、その他の言語は基本的に VOS である。

インディヘナ言語は五百年の間にスペイン語の影響を受けており、調査となると、人により、かしまって、より規範的な文をわざわざ言ったり、スペイン語で日常すませている語彙を母語ではなんといったか必死に考えることがよくある。たとえばモパン語の場合、SVO の形を最初に聞いた小学校の先生は示した。しかし確かめるために、たまたま出会った国会議員やマヤ言語アカデミーの人に聞いた。そうすると、VOS の文で答えてきた。もちろん VOS の方がより規範的であり、SVO の方が一般的であることはこれまでの調査でよくわかっていたのであるが、さてど

ちらを例文としてとるか、困ることがよくある。

先に「その男がその犬を殺した」という文を挙げたが、アワカテコ語のデータを取りに行った最初の年に得た文は次のようなものであった。

ye yaai n-kyim-s-aan ye tx'i

アワカテコ語には長母音と短母音がある。yaai や aai は音声的には長母音であった。しかし次の年に行ったとき、インフォーマントの強い希望に応え、規範文法に従うことにして、ye yaai n-kyim-s-aan ye tx'i と書き換えることにした。

実は、二〇〇二年にアワカテコ語の規範文法が出版されたが、その間に、音韻解釈の議論がさかんにされたという。その結果、そのほとんどが長母音にする必要がないという結論に達したであろう。長母音が必要なのは、xaag (葉)、sich (タバコ)、chi (イトラン)、txook (肝臓)、bunch (遅い) などの十二語だけだという。これらはミニマルペアの xaag (土地)、sich (叫び)、chi (甘い)、txook (大地)、bach (花) などが存在するからである。音声的には長母音が存在するが、ミニマルペアのない長母音はすべて短母音扱いにしたため、長母音を持つ語が極端に少なくなった。これは考察に値するが、インディヘナ言語学者自身によつてこのような解釈がなされる段階に達してきたのは、実に感慨深い。

マヤ諸語とは

マヤ諸語はメキシコのユカタン半島の諸州、チアパス州、タバスコ州、それにグアテマラで主に話されている。しかしホンジュラス西部にも Choltei 語話者が若干いる。ペリーズにはユカテコ語とイツァ語、モバン語話者が少しと、南部にケチ語がグアテマラから近年侵入している。マヤ諸語の分布は、マヤ文明が栄えた地域と重なるが、ワステコ語だけが、遠く離れたサン・ルイス・ポトシ州東部から隣接するベラクルス州北部にかけて12万人ほどによって話されている。

人口は数万から数十万がほとんどであるが、数百人しかいないトゥサンテコ語やモチョ語などもある。話者の最も少ないのはラカンドン語(約100人)で、多いのはキチェ語で200万人に達する勢いである。

マヤ諸語は低地言語と高地言語に大きく分かれる。簡単に言うと、q/q'を持つのが高地言語で、それがk/k'に変わったのが低地言語である。そして動詞について主語や目的語を表す人称辞が、動詞の前にくるのが高地言語で、動詞の前後に分かれるのが低地言語である。

マヤ諸語はマヤ文字のもととなった言語であるが、マヤ文字の言語は低地言語を反映している。しかし低地言語は、高地言語のk/k'がk/k'のままのユカテコ語群とch/ch'に変わったCholtei 語群に分かれる。マヤ文字の言語は、音節文字の解読から、k/k'を保持して、ch/ch'に変わっていない段階の言語である。

グアテマラでは、80年代後半からスペイン語教育がさかんになるとともに、母語教育も考慮され始めた。ポコマム語やモバン語などが話されている地域では、公教育で母語による授業も行われるようになって、母語が消滅の危機にさらされていることがいよいよ現実味をおびてきた。とくに都会やその隣接地域では、スペイン語が主であり、インディヘナ家庭内でも母語が使われることが少なくなっている。親が話していても子どもは話さない、すわなち、理解できるが話すことができない受動的な話者がいまだ多い。その次にくるのは、スペイン語だけしか話せない世代となるのは明らかである。キチェ語やカクチケル語などは話者数が多く、危機言語とは言えないかもしれない。しかし確実にスペイン語が家庭内にも浸透している。それは教育の普及や親のスペイン語重視という意識の問題もあるが、テレビやラジオなどのマスメディアやコンピュータの普及も大きい。

現在オクマ言語研究所で活躍している言語学者は、20歳代から40歳代であるが、何人かに話を聞くと、小学校に入ってから初めてスペイン語を学び始めたという。母語はスペイン語でないため、一見流暢にスペイン語を話す、ときたま詰まることがあるし、ちょっとした難しい語彙など、不安がってこちらに尋ねることがあることを短い間の会話で知った。それは高等教育の不完全さかもしれないが、それ以上に母語であるかないかの違いの方が大きいのではなからうか。